

# 保育科学生の文章表現力について

佐藤 達全

## 概 要

大学生の「文章力が低下した」と言われて久しい。レポートの文章に話しことばが紛れこんでいたり、「である」調と「です・ます」調が混在していたりするのはよいほうで、意味に関係なく同じ発音の漢字が使われることも少なくない。ひどいものになると、「て・に・を・は」さえも正確に書けていない文章も見受けられる。当の本人はそんなことには一向に無頓着で、間違いを指摘すると、なぜそんな細かなことまで言われなくてはならないのかという表情である。

確かに、普段の生活では文章が書けないために困ることはほとんどないといってよい。一人一人が電話を持っている現在では、手紙を書く必要性はほとんど感じない。何か文章を書かねばならない場面に出会っても、パソコンには一般的な例文集は用意されているし、文章を作成する場合も自動的に漢字に変換される。

しかし、いくら社会が変化しても、文章を書くことがなくなるわけではないし、職業によっては日常的に文章を書かねばならない立場の人もある。保育者もその一人である。「園だより」や保護者との「連絡ノート」さらに「保育の記録」「研修報告」など、保育現場では文章を書くことがたくさんある。しかもそれらは自分のメモとしてではなく、第三者が読むことを前提として書く場合が少なくない。だとすれば、最低限の文章力を身につけておくことが求められるのは当然であろう。

そこで学生の実態を紹介し、「国語表現演習」での取り組みとその結果について考察した。

## 1. はじめに

ひごろ、学生のレポートや答案を読んでいる文章の書き方で気になることがいくつかある。その中で、かなり多くの学生に当てはまる事柄を紹介してみる。

- ①誤字や当て字が多い。
- ②主語と述語の関係が正しく対応しておらず、文章の構成がおかしい。
- ③助詞の使い方がおかしく、正しい日本語の文章になっていない。
- ④話しことばのまま書かれている。
- ⑤「見える」「食べれる」はもとよりのこと、「遠く」「やっぱし」など「最新のはやり言葉」のような表現がしばしば登場する。
- ⑥説明文を書く場合、主語と述語が正しく対応していない場合が少なくない。
- ⑦語彙が乏しいためであろうか、同じ形容詞や副詞を何度も繰り返し使っている。
- ⑧代名詞を用いて表現することがほとんどないので、ものや人の名前などを何度も繰り返し書いている。
- ⑨文章が長いため、「ので」や「が」といった助詞を用いてだらだらと続ける場合が多い。そのため、一つの文章が200字～300字も続いている文章を時々見かける。
- ⑩推量表現（ではないでしょうか）がほとんど見られない。これは、与えられることに慣れてしまった結果、想像力が乏しくなったからであろうか。

⑪800字程度の文章を書くときに、一つも段落を区切ることがない学生も見られる。

⑫文末の表現がすべて「思います」や「です」などワンパターンである。

⑬文章表現力ではないが、テキストがすらすら読めない学生も少なくない。常用漢字すら完全に覚えていないことと、アクセントがおかしいために他の意味に受けとめられかねない読み方をする学生が目立つ。

このような、「気になる文章」が非常に多いため、折に触れて

①あやふやな漢字は辞書を引いて確かめてから書くようにすること。

②正しい日本語の文章を書くように心がけること。

といい続けてきたのだが、一向に改まるようすが見られない。

日本人が手紙を書かなくなったといわれる。携帯電話がこれだけ普及しているのだから手紙の果す役割は以前に比べると相当に後退していることは否定できない。また、パソコンもかなり普及しているため、文章を書く場合でも、キーボードを操作するだけで漢字に変換されるから、漢字を知らなくても平気だと考える学生は少なくない。しかし、パソコンでも同音異義語を判断しなくてはならないのであるから、やはり確かな文章表現力は必要なのである。

しかも、文章力をつけることは保育科の学生にとって特に重要である。彼女たちが短大を卒業して保育者になったときには「園だより」や「連絡ノート」「保育の記録」など、文章を書くことを避けるわけにはいかない。ところが現実にはその文章能力は決して十分なものとは言えないし、さらに困ったことに自分たちの文章力に対して疑問すら抱いていない学生も少なくない。

そこで、これまでの文章の勉強について聞いてみたところ、必ずしも十分な指導を受けていないことに気づいた。次に示したのは学生の実態の一

部である（授業中に質問をし、139人が回答）。

質問1 小学生時代に作文の指導を受けたことがありますか。

ある(100人)	ない(39人)
----------	---------

質問2 (指導を受けた人に質問) 先生は文章の間違いを直してくれましたか。

はい(65人)	いいえ(35人)
---------	----------

質問3 夏休みに絵日記の宿題がありましたか。

あった(106人)	なかった(33人)
-----------	-----------

質問4 (あった人に質問) 先生は文章の間違いを直してくれましたか。

はい(45人)	いいえ(61人)
---------	----------

質問5 中学時代に文章の書き方の指導を受けたことがありますか。

ある(108人)	ない(31人)
----------	---------

質問6 これまで原稿用紙の書き方について習ったことがありますか。

ある(118人)	ない(21人)
----------	---------

質問7 中学時代、先生はレポートの文章を直してくれましたか。

はい(82人)	いいえ(57人)
---------	----------

質問8 高校時代、先生はレポートの文章を直してくれましたか。

はい(99人)	いいえ(40人)
---------	----------

これまでの作文指導がどうであれ、短大を卒業して幼稚園や保育園の現場に出たときには、最終学校での指導が問われることは否定できない。そこで「国語表現演習」の授業では、「演習」という本来の目的に沿って、毎時間、文章を書いて提

出させ、その問題点を指摘することにした。まずは、学生の実態を紹介する。

## 2. 学生の文章の実態

### (1) 敬語に関して

\* 何で今までの先生は添作してくれなかったのだろうと不思議に思いました。

(先生に対して「くれなかった」という表現をしている。「添作」も誤字)

\* 保育実習で、紙芝居を読ませてもらったり、部分的にピアノを弾かせてもらいました。

(「もらう」という表現。並列の「たり」は後ろの部分にも付ける)

\* 先生方がいろいろ配慮してくださり、少しずつ流れを把握できるように指導してくれました。

(初めは「くださり」となっているが、後半では「くれました」と書いている)

\* 施設の先生は、「どのような障害をもっている、もっている力を十分に発揮できる環境を設備し自分の力で生きていくことを援助することが、住み慣れた家や地域での安心した生活を保障することにつながる」とおっしゃっております。

(「おっしゃって」はいいのだが、「おります」は謙譲語。「設備」ではなく「整備」と書くべきではないか)

\* 多くの先生に見てもらうことで、多くのアドバイスがいただけただので、私にとってとてもプラスになりました。

(「見てもらう」はおかしい。次は「いただく」と書いてある)

\* 幼稚園のころの記憶はあまりありませんが、先生方はいつも笑顔で私たちに接してくれました。

(先生に対して「くれた」と書いている)

### (2) 同音異義語・誤字に関して

\* これから保育者を目指す私にとって、正しい

文章を書くということは、必要不可欠です。

(「不可欠」と書くべき)

\* 同じ誤ちを子どもたちがしています。

(これは「過ち」と書かなくてはいけない。間違いの多い漢字の一つ)

\* 遠出はしませんでしたが、急がしい日々を送りました。

(「急ぐ」と「忙しい」を取り違える学生は少ない)

\* 初めてのことで、不安・緊張などの複雑な気持ちをもっての実習のスタートになっていました。

(「復」は「復習」のときに用いる)

\* 明るく元気いっばいに責極的に取り組んでいこうと、前向きな気持ちになりました。

(これもよくある間違い。「責任」と「積極的」とを区別しなくてはならない)

\* 先生という仕事は、すごく大変な仕事だと新たためて感じました。しかし、とてもやりがえのある仕事だなあと思いました。

(「やりがい」を「やりがえ」と書く学生も少ない。また、文章で「だなあ」と書くことも多い)

\* しかし、大変なことばかりでなく、子どもたちの笑顔など、数知れない喜びも体験することができるので、やはり保育士という仕事はやめられないと新たためて感じました。

(「新た」と「改めて」を書き分けられない学生も多い)

\* 今年で学生生活最後の夏休みになります。夏休みには保育実習と施設実習があるので、暑さに負けずに一生懸命頑張りたいと思っています。そして、今までには気づくことのできなかった改たな発見ができたならよいと思います。

(「新た」と書かなくてはいけない)

\* もう一人は親の仕事が忙しくてあまりかまってもらえず、園では泣く、わがままを言うな

ど先生方を困せてばかりいました。

(「困らせて」と送り仮名を正しくつけなくてはいけない。「上がる」と「上る」や、「集まる」と「集める」「集う」などのように、送り仮名で読み方や意味が変わる漢字もあるので注意が必要)

\*連休最後の日曜日、友達と車で軽井沢へ行きました。道が混んでいることを予想して早目に家を出ましたが、以外と道がすいていました。

(「以外」と「意外」は間違いのもっとも多い熟語の一つ)

\*先生は心良く引き受けてくださいました。

(「心良く」もうっかりと書いてしまう学生が多い)

\*先生方の説明を見て、子どもたちにわかる言葉で、短的に大切なことを言わなければならないことがわかりました。

(「短

\*今回の実習を完壁にやることは無理かもしれませんが、せめて自分でたてた目標だけは達成したいと思います。

(完璧の「壁」が「壁」でないことを知っている学生は少ない)

\*低抗することのできない子どもに、どうして虐待などをするのでしょうか。

(これは「抵抗」と書く)

\*除々にではありますが、文章力もついてきたと感じています。

(意味を考えれば、「徐々」という漢字が正しいとわかるはず)

\*今回の実習に向けて、私が最も力を入れたいと思っていることは、自分に自信をもって実習に望むということです。

(正しくは「臨む」と書くのだが、「望む」と書いている学生が多い)

### (3) 基本的な言葉・表現に関して

\*ふだん何気に書いている文章を読み返してみると、話しことばになっていたり、文章のスタイルが異なっていたりなど、いろいろな点に気づき、恥ずかしくなりました。

(「何気に」は学生の間で流行しているのかもしれない。最近のレポートにはときどき登場してくる)

\*目に見える傷は時間が経てば消えますが、心の傷はなかなか消えることができません。

(「消えることができる」のではなく「消すことができる」と書かなくてはいけない)

\*けれども、先生のを見ているのと実際にやっているのでは違く、部分実習では混乱して、導入ができませんでした。

(「違

\*こうした光景は、園庭の広さが十分でない園では、なかなか見られないのではないと思いました。

(正しくは「見られないのではないか」と書かなくてはいけない)

### (4) 「たり」(並列) に関して

\*特に活発な子は、木に登ったり少し高い所からジャンプをしていました。

\*私の特技でもあるソフトボールでキャッチボールをしたり、バトミントンをしました。

\*毎日やっていくうちに慣れてきて声も出るようになったり、他のこともできるようになってきました。

\*世の中の人たちは、遠くに遊びに行ったり、何か思い出を作ったに違いありません。

\*それが終わるとお盆にはいるので、祖母の家へ行ったり友達と海やプールへ行き、楽しみたいと思います。

\*注意をしたり叱ったあとには、必ずフォローが必要だと感じました。

\*時に笑顔を見せたり、子ども達のやる意欲を引き出すことや、不安を取り除くことができます。しっかりと見極めないと子どもの自由を奪ってしまったり、自立を妨げてしまいます。

(並列表現で「たり」を使う場合、それぞれに「たり」をつけなければいけないのであるが、正しく書いている学生はほんのわずかしかない)

#### (5) 主語・述語に関して

\*家の中に閉じ込めたままあまり食事を与えなかったり、宙吊りにされ、殴る蹴るなどの暴行を加えたり、大人でも絶えられないようなことをまだ生まれてまもない子どもたちが虐待という形でうけている。

(「食事を与えない」と「宙吊りにされ」という表現で、主体が子どもなのか大人なのかわからない。また「絶える」は「耐える」が正しい)

\*友達からゴールデンウィークの初日に「帰ってきたよ」と電話をもらい、遊ぼうかという話になり、五月五日の子どもの日に私の家に泊まりで遊びに来ました。

(一つの文で、前半部分と後半部分とでは主体が異なっている)

\*私の夏休みの過ごし方は、まず、七月末から八月にかけてバレーボールの大会があります。そこで良い成績をとり、チーム全体の力をつけて自分自身に自信をつけたいと思っています。

(「夏休みの過ごし方は」という主語に対して「大会があります」という述語はおかしい)

\*責任実習で不安でいっぱいの私に、「大丈夫だよ」「頑張ってるね」と、励ましていただいたり、忙しいなか、製作で何をしたらよいかや、日案の書き方などのアドバイスをしていただいたりと、とてもお世話になりました。

(「私に」「励ましていただいた」という表現では、「だれが」「どうした」が正しく結びつけられていない)

\*先生方がとてもたくさんのアドバイスをしてくださったり、私が失敗をしてしまったときも優しく励ましてくださったりよくしていただきました。

(初めは「先生方が」「してくださった」と書いているが、後半では、「いただいた」とおかしな表現になってしまった)

\*また、指導をしていただいた先生方が、みんな温かく、このような環境の中なら、自分の持っている力を十分に発揮した保育ができると思いました。

(「いただいた」でなく「くださった」が適当であろう)

#### (6) 「です・である」に関して

\*国語表現演習を通して、今までたくさんの課題について作文を書いてきました。中学・高校ではあまり作文を書く機会がなかったので、改めて書くと自分の考えていることもうまく表現できず、とても難しかった。

\*中学生のとき、初めて東照宮へ行き、そのときは建物の造りなどにただ感動していただけでしたが、年月が過ち少し大人の目線に立ってみると、建物の細かな彫刻などまで見ることができたり、その意味を知ったりすることができました。中でも、「見ざる、聞かざる、言わざる」の彫刻ではただ悪いことを見ない聞かない言わないというものだけだと思っていたが、あれは人間をサルにおきかえ、女性の一生を表わしたものだと知った。

(前半と後半で「敬体」と「常体」をまぜこぜにしてしまう場合もときどき見られる。どちらの文体でもかまわないが統一してはいけない)

#### (7) 説明文に関して

\*私がA幼稚園を志願した理由は、園の一日の

流れやようすが自分の希望する流れと同じであり、またのびのびと保育ができる環境にとても興味があります。

\*私が虐待について思ったことは、虐待はその親自身が幼い頃に経験したこと、親にされたことを自分の子どもにする傾向が多く見られると思います。

\*A幼稚園の教育目標の一つ目として、個性が豊かで創造的な子ども、二つ目に感性が鋭く豊かな子ども、三つ目には友達と協力して意欲的に遊ぶ子ども、四つ目に自習的な態度で最後までやり遂げる子ども、五つ目は生命あるものを大切にする子どもということを目標にしている幼稚園です。

\*今回の幼稚園実習で、私が特に力を入れたいことは、一年生のときにできなかったことがクリアできるように実習に臨みたいと思います。

\*しかし、私の頭の中にあることとか調べたことは、社会参加や地域交流をたくさんとり、その中でたくさんの人たちと触れあったり、その障害の度合いによって、社会復帰できるようにいろいろな作業をしたりします。

\*逆によかったと思うことは、学校の授業で手遊びをしたので、とても役に立ち、堂々とできました。

\*その学んだこととは、実習ノートの書き方から園児に対しての接し方や言葉かけ、紙芝居の読み方など細かいところまでご指導いただき、本当によい勉強になりました。

\*責任実習を経験してみてわかったことは保育者自身が楽しもうとする気持ちを大切にし、また、子どもへの言葉かけを多くすることが大切だと思いました。

\*私がA園を志望した理由は、短大一年の四月からずっとアルバイトをさせていただいて、その中で、たくさん子どもたちと接し、とてのびのびと生活をしている姿を見ること

ができました。積極的に取り組むことというのは、前回の保育園実習で、自分は実習生という考えのまま実習していたので、園の先生から「それでは自分の実にならないよ」と言われとても悔しい思いをしました。

\*反省点は、絵の具を用意している間に、子どもたちを待たせてしまったので、そういう所で気を配ることができたらよかったと反省しました。

\*私がA園を志望した理由は、実習でお世話になり、園のようすや教育方針などがわかったので、この園を志望しました。

\*これからの課題は、たくさんの幼児曲を弾き歌いができるようになりたいと思います。  
(課題は「課題」と書くべき)

\*私がA園を志望したのは、のびのびしていて明るい保育園だと思いました。

\*私がこの幼稚園を志望した動機は、観察実習や教育実習に行って、とてもよかったです就職を志望しました。

\*今回の幼稚園での教育実習は三週間ということで、責任実習も行わせていただき、実際の保育現場で、自分のやる気次第で本当はたくさんを経験し、学んでくることのできる実習です。

\*今回の実習で学んできたことは、どう指導計画をたてて、子どもたちを指導し、援助し保育を展開していくのかを理解したいと思います。

\*私は、保育園を志望します。理由は、二月に行った保育実習の時に実習を行わせていただいた園の雰囲気がとてもよく、子どもたちものびのびと生活していて、家庭的な感じがすごく印象的でした。

\*私がA園を志望した理由は、教育実習をさせていただき、A園の方針が私にあってると感じ志望しました。

(説明文を正しく書いている学生は非常に少

ない。「感じたことは」「志望の理由は」という主語に対する述語としては「～ということです」と説明が必要である)

(8) 「て・に・を・は」に関して

\*一つの文に同じ言葉を繰り返して使われていました。

(「同じ言葉が」と書くべき)

\*今回の実習で、自分の課題がどの程度達成したかという、自己判断ですが50パーセント位しか達成していないと思います。

(「課題が」でなく「課題を」と書くべきであろう。あるいは「課題が達成できたか」と書いてもよい)

(9) 文章の構成に関して

\*子どもたちを幅広い視野で、いろいろなことを見て多くを感じ学んできたいです。

(「敬体」で文を書く場合「いきたいです」や「楽しかったです」といった「小学生の作文」スタイルが非常に多く見られる。また、日本語の文章としての構成ができていない場合も少なくない)

\*人間関係が殺伐とした時代だからこそ、心を寄り添い心をかよわせあえる、そんな保育を目指しています。

(「心を寄り添わせ」と書くべきところであろうか。また、「殺伐」が正しい)

\*こういった話を聞くと、その親に対して私は怒りや、なぜわが子を手にかけるのだろうかという疑問だったり、他の回りの人達は気づいてあげられなかったのだろうかという残念な気持ちになります。

(「怒りや」がどこに続くのだろうか。「疑問だったり」はどの言葉を受けているのだろうか。文章の構成がきちんとできていないものが多くなった)

\*何もしないで一日が終わってしまう一日もありました。

(「一日」は一度でよい)

\*すべてに関して、失敗や経験をしていき、自分が成長していければよい期間を過ごせたと実感できそうです。

(主語と述語の関係はどうなっているのか)

\*前回の幼稚園実習でできなかつたこととは、園全員の子どもと触れあうことができず、私の所に積極的に寄ってきてくれる子としか、触れあうことができなかったのも、今回の実習では、声をかけられない消極的な子にも目が向けられ、園全員と触れあえたらいいなと思いました。

(「できなかつたことは」といいながら、また「できず」と書いている。「園全員」ではなく「園児全員」と書くべきであろう。さらに最近目立つのは、「～したい」という意志を表わすのでなく、「できたらいいなあ」と他人ごとのような表現が増えてきたことである)

\*今までに、保育園・幼稚園と保育者が子どもの成長に、どのように働きかけるか、また、保護者と保育者との関係の重要性を、実習で知ることができました。

(主語と述語の関係が正しく表現できていない文章である)

\*今日の日本のニュースでは、子が親から虐待を受け、亡くなるという事件を良く耳にします。その虐待の内容は、残酷なものばかりで、熱湯を浴びせられ、大火傷を追ったり、体を高い所から地面へと強く叩きつけられたりと聞き、心が締めつけられる思いで満たされました。

(「満たされた」は普通、よい状況を表わす場合に使われるのではないか。主語と述語の関係もおかしい)

\*今まで保育士になるためにいろいろ勉強や高校生の時からピアノを習い始めました。

(「勉強や」がどこにつながるのか)

\*指導案の書き方では、大まかに書いてしまい、

細かく明確に書くよう指摘されました。言葉かけ一つひとつが大切で、自分の言いたいことについては全部書き写しておくよう教えていただきました。

(初めの文では「指摘された」と自分が主体になった表現であるが、後半では「教えていただきました」と相手が主体の表現になっている)

- \* 今回の実習が、私にとって意味のある実習になったことが、私の成長につながると思います。

(主語と述語の関係はどうなっているのか)

#### (10) 話しことばに関して

- \* 実習を振り返ってみて少しではありますが、達成できたんじゃないかと思います。

- \* 一番勉強になったことは、言葉がけをすることです。特に年少の場合は、話さないときがないくらいに、こんなことまで言わなくてもいいんじゃないかということまで言葉がけが必要だと教えていただきました。

- \* 園児ができないことをいつまでやってもしょうがないので、次の行動に移すということを肌で学びました。

(「肌で学ぶ」ではなく、「体験から学ぶ」とすべきであろう)

- \* 一日の責任実習でも半日実習の反省は少し生かされたけど、やっぱりうまくいきませんでした。

(話しことばをそのまま使う学生もときどき見受けられる)

#### (11) 同じ語のくりかえしに関して

- \* 五月の十八日から三週間、幼稚園の実習です。私が実習させていただく幼稚園は、〇市にあるS幼稚園という、定員八十名ほどの幼稚園です。

(「幼稚園」という語が四回も繰り返されている)

- \* 今回の実習は、前回の観察実習とは違い、参

加実習もあるので、より一層気持ちを引き締めて頑張りたいと思います。

(「実習」という語が三回使われている)

- \* 幼稚園での生活は、毎日が経験だと思います。子どもと一緒に関わりながら、子どもも保育者も成長していくと思います。その経験の積み重ねが大切だと思います。私は子どもと、信頼関係を結べるような保育者になりたいと思います。また子どもが毎日楽しく生活できるように、環境づくりも考えていきたいと思っています。それから、短大で得た多くの経験をA園で活かしていきたいと思いました。

(「子ども」という語が繰り返されている)

- \* 今回の買い物は、自分たちのものを買に行ったのではなく、数日後の母の日にわたすプレゼントを買いにでかけたのだ。

(一つの文に、「買う」が三回も使われている)

- \* できあがったコマも、子どもたち一人ひとりの個性がでていて、いろいろなコマができあがりました。

(「コマ」は一回の表現で十分)

- \* 毎日が驚きと発見の連続の日々でした。

(「毎日」と「日々」はどちらか一方が不要である)

- \* それに、先生方にとってもよくしていただいたりしてとてもよかったし、それに幼稚園の感じもとてもよかったと思いました。

(「よかった」が多すぎる)

- \* 連休中、私は両親と一緒に日光東照宮へ行きました。日光へは、何度か足を踏み入れたことがありましたが、今回の日光での観光は、今までとは違う見方の旅ができました。

(「日光」という固有名詞でなく、代名詞を用いて表現したほうがよい。「足を踏み入れる」という表現もおかしい)

### 3. 授業での取り組み

学生に限らず、文章を書くことはほとんどの人が苦手としているであろう。しかも、一朝一夕に文章表現力が向上することはほとんど期待できない。文章の書き方について書かれた本はたくさんあるが、それを読んだからといってすぐに表現力が上達するわけではない。よい文章をたくさん読むことと、こつこつと自分で文章を書いて間違いを訂正してもらうしか道はないであろう。

そこで、授業では困ったときの参考になるように文章表現のテキストは用意したのだが、それを機械的に解説することはせず、毎週テーマを決めて400字の文章を書くことを課題とした。提出された文章を読み、誤字や表現の不適切などところを赤字でチェックして返却し、その中から例文として適当なものを例文集としてプリント・配布し授業中に学生と一緒に訂正をした。

学生は半年の授業で課題文を10回提出したが、不適切などところを指摘するだけで、訂正は学生に任せた。これは、他にも授業を担当しているうえに公務分掌もあるために、毎週150人の課題文をすべて訂正するだけの時間が取れないこともあるが、自分で直すことによって間違いをしっかりと認識してほしかったからである。

第1回目の課題文を読むと、基本的な書き方の注意を説明しておいたにもかかわらず、予想していたとおりの間違い表現が数多く発見できた。このことから、一般論として指摘しても、自分のこととして意識しない学生が少なくないことが裏付けられた。

初めは原稿用紙がチェックで真っ赤になる学生もかなりいて、落ち込む姿も見うけられたが、提出回数が増えるにつれてチェックされる場所は確実に少なくなっていった。もちろん、よく書けている文章には褒め言葉などを書き入れて激励したことは言うまでもない。

毎年のことであるが、この授業で私は学生と根

気比べをするつもりである。何度チェックされても、同じ間違いを繰り返す学生も少なくない。そのため、あまり思い詰めないようにして、時には学生と「娯字」を楽しんでもいる。「2. 学生の文章の実態」で紹介したもののほかにも学生の創造的な「感字」(まさにフィーリングの時代)は次々に生み出されている。それを紹介してみよう。

一諸に行く (諸々のみんなが仲間)

風で悪感がする (寒い感じ?)

仮空の人物 (仮の人か?)

雲り (雲に「り」をつけてもだめです)

決戦投票 (選挙は戦いには違いないが……)

大学の講議 (だから授業中におしゃべり)

純心な少年 (混じり気のない心)

心気一転 (気持ちを切り替える)

二足三文 (二足でまとめ買い)

無我無中 (意識はないですか)

危機に落ち入る (間違いやすいもの)

お金を借す (反対に覚えては大変)

危機一発 (髪の毛一本ほどの際どさ)

下熱剤 (熱をさげるのですが……)

無脳 (植物人間ですか)

殺倒 (本当に危険ですね)

友人を紹待する (手招きするのです)

成積 (これでは結果が心配です)

全々 (これでは全然だめですね)

### 4. 添削の結果

毎週、150枚の課題文を読むことはかなりの負担である。それでも、提出してもらった次の週には必ず返却することを実行した。それは学生への質問から、小・中学校・高校時代の作文やレポートを提出した際の先生方の対応が必ずしも適切ではなかったと思われたからである。もちろん、課題文を毎週書くことに負担を感じる学生がいたことは否定できない。「なぜこんなに」と不平を言う学生もいた。それでも、私は続けた。

チェックしたところを確実に訂正してもらうた

めに、期末試験の代わりにレポートとして、すべての課題文を訂正して再提出してもらうことにした。10回分の課題文（全学生で400字詰め原稿用紙にして約1500枚）を成績提出日までに読み返すことはさらに大変であった。しかし、チェックしたところがかかなり適切な表現に書き直されているのを見ると、心は軽くなった。

最終レポートには新たな課題文も提出してもらった。テーマは「課題文の添削指導を受けて思ったこと」である。次にその中から代表的な感想を紹介する。

\*今まで、小・中学校から高校と文章の書き方や注意事項を学んできたつもりでしたが、添削を受けたり授業を受けたりする中で、自分の文章力のなさに気づかされました。

\*文章を書いているときは自分の間違いにまったく気づかず、指摘されて、はっとすることがありました。

\*小学校の頃から作文は何度も書いてきましたが、今まで添削をしてもらったという経験はあまりありませんでした。そして今回の授業で、どれほど自分が間違っていたかということがわかりました。

\*授業で間違いを指摘しあい、毎週添削をしていただいたことで、着実に正しい文の構成の仕方を身につけたと思います。

\*自分が書いていた文章が、これほど間違っていたとは気づきませんでした。

\*文章の添削をしていただいて、改めて文章を書くことの難しさを知りました。

\*私は文を書くことが苦手でしたが、毎週書くことにより、少しずつ書くことになれてきたように思います。

\*授業を通じてやっと文を書くことに慣れてきたので、これをきっかけにして文を書くことが少しでも得意になるよう頑張りたいと思いました。

\*添削を受けてからは、直されたことなどを次

からは注意して書くようになり、意識の持ち方が変わったような気がします。

\*これからは、辞書をこまめに引くようにしたいと思いました。

\*添削をしていただいた文章を見ると、書く回数を重ねるにつれて間違いが少なくなっていくのがわかりました。何度も書くことによって文章になれることは大事だと思います。

\*文章を書くことで、自分自身と本当に向き合うことが多くなりました。

\*今まで作文を書いて先生に提出しても、丸がついているだけだったりはんこが押してあるだけだったり、添削していただいたことはありません。そのため、間違いを正しいと思いこみ、そのままにしていました。でも、この授業で直すことができ、本当によかったと思います。

また、先生は、頑張っ書こうという意欲を引き出してくださいました。先生は、よい文章が書けたら丸をつけてくださるからです。毎週一週間前に書いた作文が返されるとき、緊張します。今日は丸がついているといいな、という気持ちになり、見るのが楽しみです。

まだ二つしか丸をもらっていません。もっと文章力をつけて、いい文章が書けるように練習したいと思います。

\*漢字を間違えると、意味が変わってしまうので、気をつけようと思いました。

\*先生から添削していただいた作文を直してみると、少しの言葉の使い方や余分なところをなくすだけで、今までより文章の流れがスムーズになり、内容もわかりやすくなって、自分の文章のどこが悪かったのか、間違っていたのかがわかりました。

\*文章を書いているときは、その文が変だとは思わずに書いていました。しかし、後から変な文章をピックアップしてみると、間違いに

気づきます。書いている時に、間違いに気づけるようになりたいと思いました。

\*小学校の頃から作文を書いているのに、書き方は全然進歩していませんでした。その原因は間違いを直そうとしなかったからだと思います。先生に直されているのに、書いたら終わりという状態で、返ってきた作文を読み返していませんでした。今回は、直されたところは絶対に訂正しなければならなかったので、自分の間違いに気づくこともできて、どう直せばよいのかもわかって、とてもよかったですと思います。

感想文は最終レポートとして期末試験の期間に提出してもらった。成績評価につながることを意識する学生もいたであろうから、差し引いて受け止めなくてはならない。けれども、「これだけは知っておいてほしい」と考えた点についてはかなりの学生が意識してくれたようで、それなりの成果は上がったと考えている。

ほとんどの学生に共通した感想として、「日本人として恥ずかしくない文章が書けるようになりたい」「残り少ない学生生活でできるだけ多くの本を読みたいと思った」「文を書くことに少しずつ慣れてきたようだ」「保育者として、文章力の必要性を認識した」と結ばれていた。その気持ちをできるだけ持ち続けてほしいものである。

## 5. 若干のまとめ

今回の添削とその感想から、次のようなことがわかった。

- ①一般論として正しい書き方や間違った表現について説明をしても、自分のこととして認識しない学生が少なくない。
- ②そのため、一人一人に対して、本人が書いた文章を読ませて間違いを指摘することが必要である。
- ③チェックするだけでなく間違いを訂正してしまうと、その間違いをしっかりと意識しないまま終わってしまうおそれがある。
- ④チェックして学生に訂正させ、それでもわからないところがあったら説明する。(授業では、チェックしてあるところで、直し方のわからないところは質問するように言っておいたのだが、質問した学生はほとんどいなかったため、全体に説明することが不可欠)
- ⑤文章力は一朝一夕には身につかないので、学生と根気くらべをする気持ちで取り組むことが必要である。
- ⑥すぐに効果は現われないが、少しずつ文章の書き方や、文章を書くことに対する意識が変わってきたことは確かである。

(2001年9月28日 受理)

# Writing Ability of Students at the Department of Early Childhood Education of Ikuei Junior College

Tatsuzen Sato

## Abstract

It has long been said that writing ability of college students has been deteriorated. Some of the spoken words are put in their term papers and “de-aru” and “desu” forms are mingled with “masu” form and it is often found that they tend to use homonyms without considering their meanings. To make matters worse, we sometimes see sentences in which even “te, ni, o, and ha” are not properly used. The students themselves do not seem to care about the mistakes. When their mistakes were pointed out, it seems that they do not understand it and wonder why they are told to correct such small things.

It is true that we rarely have any trouble in our daily life even if we can not write properly. At present every individual has his own telephone and we find no necessity to write letters. Even though we have something to write about, convenient manuals help us type it out on a computer, which also changes the letters automatically into the proper Chinese characters.

Whatever changes our society experiences, however, we will surely have something to write about. People with some professions have to write for their daily duties. Teachers for early childhood education are among them. They often have to write newsletters, notebooks to correspond with parents, record diaries for children and workshop reports, which are usually regarded not only as their own notes but as the documents other people are supposed to read. We are thus required to have a minimum level of writing ability.

In this paper I showed the present situation of the students and examined the activities and result of the class “Japanese Writing Seminar.”